

# 暗黒定数式

## THE DARK CONSTEXPR

(見本)

ボレロ村上 南正太郎

as\_capabl ちゅーん

4869 ハコ

如月真弘 かなりあ奈留

野村



## 目次

天鯨の空	7	ボレロ村上
Metastable 3	9	南正太郎
ノントリビアリティ	11	as「capabl
ホワイトデー	13	ちゅーん
スペースデブリ・シンドローム	15	4869
POISON&FOREST — 神なきDOLLの探偵団 —	17	如月真弘
ラビュリントス	19	ハコ
憐愛少女少年	21	かなりあ奈留

空の  
ポ  
ー  
ト  
フ  
ォ  
リ  
オ

23

---

野  
村

タギリの夏至は、風とともにやってくる。

はるか東方から運ばれてきた潮の匂いとしめりけを孕んだ大気が、渴いた大地にしがみつくと灌木かんぼくのすきまをすすると撫でていくのを感じて、ぼくは跳ね起きた。ねぐらにしていた灌木の茂りがきしきしと肌をひっかくのも気にせず、まっくらやみのなかで立ち上がる。

風が匂いを運んでくる――。

土埃と、地に根を生やす地衣類と堅強な木々、その間をかげずりまわる地のけものとさんざめく虫ども、はるか遠くの潮騒、波間をいきかう水の落とし子のざわめき、……それらタギリじゅうの生きとし生けるものどもの息づかいすべてがかき混ぜられた濃密な匂いとなって吹き抜けてゆく。

それは夏至のおとずれを意味していた。

カロロロロロロロ――

ぼくは氏族につたわる喉笛を真夜中の空に捧げると、衣

服のほかはたったふたつの持ち物である蔓つるのポシエットと山刀をひっつかみ、風のやってくる方角に聳そびえたつ大ンガイの山頂めざして駆けだした。

ふもとから中腹に近づくにしたがって、あたりのさざめきは大きくなっていく。

地中に住まうものどもはいそいと巢にもぐりこみ、そうでない地上のものどもはいっせいにふもとのほうへ殺到する。ちいさな多足類や蟹どもものたてる無数の足音がぞろぞろと絶え間なく響き、次いでがさがさと藪をかきわける中型のけもの群れ、そしてひととき巨大な竜類どもが地を踏みならす震動をベースリズムとするハーモニーが大ンガイ一帯を横溢する。

かれらはみな、逃れようとしているのだ。この風の向こうからやってくる《大渦巻》から。

いつか夏至の陽が大ンガイの座から見えるころには、このあたりは息ひとつなく、まっさらな静寂に包まれていることだろう。そうなってしまっただけでは、ぼくは食べるものもなく、すきつ腹をかかえて夏至の朝を迎えることになる。

そいつはごめんだ。

ぼくは駆けながらジャンプすると、強靱なしなりのある若木の枝をつかみ、その反動と全身のパネをつかって空中

にとびあがる。槍の穂先みたいにとがった棘の木に気をつけながら、放物線の頂点ちかくで別の枝にとりつき、さらに上をめざす。密林の天蓋のように屹立する巨木どもの樹冠のはるかてっぺんへと。

——いた。

薄闇に見わたす木々の間をどしんどしんと駆けぬける、竜類よりも高い首と美しいくちばしをそなえた眼のさめるような蛍光紅の巨体。ハグウッドだった。

ぼくは幸運への感謝を大ンガイに眩くと、契約のことはいにしえの呪詞プロトコルにのせた喉笛で響かせる。

カロウロルルルルルル……

ただひとつ不安なのは、あのハグウッドの個体がどこか遠い別の文化圏に属する氏族の誘発をうけた末裔で、ぼくの知らない異なる呪詞プロトコルしか受けつけないという可能性だったが、——どうやら、無用な心配だったようだ。

ハグウッドは立ち止まってくちばしをこちらに向けると、くつくつと値踏みするように二、三度首をかしげる。クウルル、という承諾を意味する応答レスポンスの嘶いなきとともにこちらへと歩みを変えるのが見えた。どうやらぼくはかれの目になつたらしい。その巨体がぼくのつかまる樹冠の真下に来たところで、飛び降りてふかふかした分厚い柔毛に身をまかせた。

ぼくはかれの首の根元まではいあがると、てのひらに青

と黒で刻まれた文様をそこへ押しあて、じかに呪詞プロトコルの交換をはじめた。はるか地球時代から受け継がれた無声の文法でもってことばをかわす。

——ソラ、ソラ、さあどうした、《大渦巻》までにはまだ間がある、それまですこしぼくに付きあっちゃあくれないか、けもの氏族とちからの輩よら、草の氏族の狩りの腕をお目にかげよう、わが草より織りあげた山刀が、地の竜類をかき裂くのを見たくはないか、ソラ、ロロウ！

——好奇と承諾、よろこびの汽笛！

筋肉の敷きつめられた巨大な樽のようなハグウッドの胸がぶるりとうちふるえると、まださざめきの鳴りやまない上方の六合目あたりへと地響きが逆走をはじめた。行き先はかれが知っている。おそらくは狩りの相手にふさわしい、すばしこく強壯な竜類のねぐらへと。

ハグウッドの首のたてがみにつかまったぼくは、揺れにリズムをあわせながらようやく一息をついた。

そういえば、たてがみのあるハグウッドというのもめずらしい。

ぼくはポシエポシエトリーットから輝葉類の種をひとつまみして、誘発する。ぼうつと燐光がまたたき、かれのたてがみを煌々こうこうとあざやかにきらめかせた。

赤に金毛まじりのたてがみ。

遠目の暗がりでは気づかなかった色彩。

そこは墓場だった。

夕日の赤色がどす黒い雲と混ざり合ったグロテスクな空と、耳障りな鳴き声を上げながらあてもなく周回するカラスの群れ。もうずっと沈みかけたままの太陽は一向にその姿を暗ますことはなく、おびただしい数の十字架が石畳に複雑な影を滲ませている。

私はひとつの墓の前で立ち尽くしていた。

その簡素でみすぼらしい石塊は、周囲のそれと同じようにキリスト教の様式に従って装飾が施されている。こんな場所一度も来たことがないというのに、家は代々浄土真宗だというのに、私にはその墓が自分のために作られたものであるとすぐに理解できた。

そう、これは私の墓。私はつい先日、死んでしまったのだ。まるで幼いころ1+1が2であることを誰に教わるでもなく知ったのと同じように、私には自然とそれを理解す

ることができた。

だがこれが自分の墓なのだとすれば……私は一体どうしてここに立っているんだらう。死してなお墓に入らずこの場に立ち尽くしている自分は、一体何者なのだらう。そんな疑問が頭をよぎったが、それについて深く考えたくもなかった。

そんな風にしばらくカラスの鳴き声を聞いていた私の後ろ。死人のように動かず、ただじっと自らの墓石を眺めていた背中の方こうで、ひとつの気配がした。

ざり、とスニーカーが石畳をこする音。少しだけ緊張したような息遣い。

「あの……」

気配が口を開いた。その声は若い……ちょうど私と同じくらいの歳の女の子のもの。音の伝わり方から、声の主が自分より数歩ほど後ろに立っていることがわかる。

「えっと……ごめん、どこから話したらいいんだろ……」  
その人は戸惑っていた。気まずそうな声色が夕暮れの空に溶けて消える。下を向いて必死に言葉を紡ぎ出そうとしている姿が私の脳裏に浮かんだ。

「私を連れ戻しにきたの？」

「……!!」

なんとなくつぶやいてみた言葉。背後の気配は息を吞むが、私は振り回らない。

「うん……そうだよ。もし嫌だつて言うのなら……」

声の主はそう言つて言葉を濁し、ぎゅっと拳を握りしめた。まだらの雲が形を変え、ゆるやかな風が墓地を駆け抜ける。

嫌だと言うのなら――

私にはその言葉の先にあるものがなんとなく分かっていた。そしてそれは背後の人物の覚悟を決めたような様子から……。

「……………」

そつと目を伏せる。

まぶたを閉じ、視界が闇の底に沈んでも、さっきまで見ていた真っ赤な夕焼けの空と、それに照らされた墓石は今も私の網膜に焼き付いている。灰色の墓碑に見たこともない文字で刻まれた私の名と、その前に立ち尽くす自分。死んだはずの自分と、それでもここに居る自分。

そうだ。私はあの日、死んでしまったのだ。死んでしまつて、でもなぜか目を覚ましてしまい、こうして自らの墓石の前で呆然と立ち尽くしているのだ。

まるで生ける屍<sup>シビレ</sup>だった。そして死した者が痛みなど感じないのと同じように、あの日、あんなに消し去りたかった胸の痛みはもはや何処かへ消え去ってしまっている。今の私にできることといえば、ただひとつ残った体を支えながら考えることをやめて立ち尽くすだけ。ならば――

「わかった」

ならば、元いた場所に戻ろう。どうせ私は死ねなかったのだ。こうして立っていることしかできないのなら、それがどこであっても同じこと。

私は目を開き、髪を踊らせながらくると背後を振り返った。

「そ、そうだね。素直に帰ってくると……すっごく助かる……かな？」

そこに立っていた女の子は私のあまりの物分かりの良さに面食らつたように目を丸くすると、そう言つて少し安堵したような表情を見せた。負けん気だけは人一倍強そうな目と、校則違反まぢがいなしといった色のふわりとしたくせつ毛。カーキ色の人民服と人民帽、左腕に巻かれた校名入りの真紅の腕章。

女の子の制服は、私の通っている高校のそれだった。



ノントリビアリティ…  
シンク、シンク、シンク

```
× auto it = v.begin()
```

```
○ std::vector<  
  std::pair<int, std::vector<std::wstring>  
>::const_iterator it = v.begin());
```

「その、autoというのは、何なのでしょか」

隣に座る同僚がおずおずと指摘したのは、数行前に私が書いたプログラムコードだった。

「あ……何でもない。すぐ直すね」

私は手元のキーを叩き、指摘を受けた箇所を即座に修正した。

二十文字に満たない短い行だったコードは、あつという間に英単語と記号にまみれた難解な呪文へと変貌した。

プログラミング労働者の仕事は、タイピングによってプログラムコードを作成する事である。文字の並びを、出勤してから退勤するまで打ち続けるのが職務だ。打ち込む文字は、もちろん適当でいい訳ではない。まず字句的に誤っ

たコードを書くと、動かす事すらできない。想定外のケースを拾い損なえばプログラムが落ちてしまう。あるいはプログラムコードとしては正しくても、意図した動作が間違っていたら当然間違った製品が出来上がる。そしてそういった明確に誤ったコードとは別に、会社の内規として「書いてはいけないコード」というものも存在する。私がさきほど書いた、autoを使用した短いコードは、「間違っていないが書いてはいけないコード」に該当する。

であるがゆえに、修正する。  
我々プログラミング労働者は、まず第一に、職務に忠実にあるべきだ。

しかし、四十がらみの気弱げなオッサン、入社年度で行けば後輩にあたる同僚氏は、釈然としない様子だった。

「今の、何だったんですか？ 打ち間違いじゃないですよね、エラーが出ていなかった」

質問されてしまった。私ことプログラミング労働者一〇〇九五七号、花も恥じらう二十代。若い肌の健康状態は、時間とともに奪われる。健康状態を維持するのは社会を構成する一員としての責務だから、時間を奪われる事は極力拒否する必要がある。しかし、聞かれてしまったので一応説明しておく。

「この前、開発ツールをバージョンアップしたでしょ。その時に入った新機能。この修正後の長々とした型名は、変

数の型がイテレータであるってだけの情報だけ、これは初期化式がbeginなんだから、普通に考えれば当然よね。autoって書くと、この当然の情報を型推論で補充してくれるようになる」

「型推論……」

「型を打つのが面倒だったから、無意識に使っちゃったけど。このバージョンからの新機能は、内規では、使っちゃいけない事になってる」

「なぜ、ですか？」

「内規が更新されていないっていうのもあるけど、新しすぎる機能を率先して使うのは考えものだっていう判断ね。このコードを他の人が見たとき、分からないでしょ」

「でも、便利なら使うべきでは」

「現にあなたは知らなかった」

それでいいのだ。知る必要のない事を知る必要はない。

高度に統制化されたこの社会、決まり事に文句を付けるコストは余りに大きい。

「先輩は、なぜ知ってたんです？」

「趣味だから」

それ以上は突っ込まないし、突っ込ませたくない。

そんなような、ペアプログラミング中の一幕があった。

私ことプログラミング労働者一〇〇九五七号と、後輩の

まんまる、どうぶつ、それからほしがた。

とりどりのそれらをクッキングシートに並べていき、二百度のオーブンで二十分。

鼻歌まじりにスイッチオン、あとは雑誌でも読んでいれば、甘い香りが漂ってくるまでもう少し。

## 前日

わたしと咲彩が知りあったのは小学生に入学した時、といっても昔の事なので良く覚えてはいない。可愛い子だとは思ったけど、実際に良く遊ぶようになったのは三年生になってからだだったと思う。確か、運動会で転んだわたしを、咲彩が介抱してくれたのが切っ掛けだったはず。

とにかく、それ以来わたしと咲彩はいつも一緒だった。どちらかといえば、わたしが咲彩について行くことの方が多かったと思うけれど、咲彩はそんなわたしの事を快く受け入れてくれた。

中学に入学してから、わたしは咲彩に誘われて剣道部に入部した。もともとひ弱なくらいだったのに、今では男子も顔負けの腕っ節である。

咲彩のほうにわたしより美人だし、頭が良く胸もあって男子にもてる。咲彩は決って運動が出来ないような子ではないけど、剣道だけはわたしのほうが強かった。

「二本目、はじめえっ!」

「いやーっ!!」

「さああああ!!」

わたしと咲彩の気合が道場に響きわたる。咲彩の竹刀の切っ先は、咲彩から見てわたしの首元よりやや右下、体重も同じ方向に少しだけ傾いている。これは咲彩の悪いクセだ。おそらく狙いは小手だろう。

「たああああ!!」

そろきた。私はここぞとばかりに竹刀を振り上げ、小手を避けると同時に咲彩の面を狙う。同時に咲彩もわたしの面を狙い、防具と竹刀がぶつかり合う派手な音と同時に、咲彩の重さがわたしの体にぶつかってきた。

鏢競り合いをしながら、少しだけ咲彩の様子を見る。面越しに見える咲彩の表情は真剣そのものだ。しかしこれではダメである、重心がわたしに真っ直ぐかかっているため、すこし崩せば簡単にスキが生れてしまうだろう。

わたしは左の小手で咲彩の両手を払うと、咲彩はわたしにかかっていた体重を反らされて、ぐらりと体がよろけた。すかさずドンと咲彩を弾きとばし、がらあきになった面に竹刀を叩きこんだ。

「てえええい!!」

審判達の旗が一斉に上がる。勝負あり。

\* \* \*

ここは首都圏から少し離れたベッドタウン。アクセスの

良さからそれなりに賑い、住宅街には大きなマンションや戸建が立ち並ぶ。そこかしこに小さな公園が設置されており、黄昏れ時になると真っ赤な夕焼けに子供達の遊ぶ声が吸い込まれていく。

わたしはいつものように、咲彩の後ろを歩いていた。海風を背に長い髪の毛をなびかせながら、夕日に向かって歩いて行く咲彩の姿は本当に美しく、わたしは複雑な気持ちを噛みしめながら、その後をついていく。

「やっぱり小春は強いなあ」咲彩は腕を後ろに組んで、ゆったりと歩きながら言った。

「うん……」わたしは小さな声で答えた。わたしは咲彩と話す時はいつもこんな感じだし、多分、彼女はわたしの気持ちの変化には気付いていないと思う。

「そんでさ、明日で良いんだっけ、久々に二人で遊びたいって」

「うん、ゴメンね、せっかく休日のホワイトデーなのに」「いいのいいの、気にしなくて、私と小春の仲じゃない」咲彩もいつものように、からかうような笑みを見せた。

「……というのは建前でね、卓の奴がデートの約束をキャンセルしやがったから、暇になっちゃったんだよね」

「……ふうん」息が詰まりそうな思いがしたが、何でもなように装った。「じゃ、また明日、いつもの場所です」

『異常なし』の文字列が、日報に自動生成されている。追加報告はなし。丁寧に彩られただけの中身の無いファイルと確認ダイアログが表示される。作業経過を表すプログレスバーを表示するための処理に一番時間がかかっているというのだから、とんでもないジョークだ。ため息をつきながら適当に『次へ』のボタンをタップした。最重要確認事項のメッセージも、毎日出されればただの画面に並ぶ黒い何かに成り下がってしまうということすら、こいつの設計者はわからなかったのだろうか。手で画面縁をコツコツと叩きながら終わりを待つと、送信作業は完了し一日の幸福を祈るメッセージが表示された。どことなく腹が立って、さっさとディスプレイの電源を切った。壁につけられた体感型スピーカーから声。『操作画面に戻る場合には、私に声をかけてください』いつもの言葉が、狭い業務室に響く。わかりきっていることだ。余計な親切ばかりのインターフェース。情報工学がどれだけ歴史を持って、エンジニ

アは結局まともな感性を身に着けなかったというわけだ。

どうでもいいことにイラつきながら自動ドアをくぐり業務室を出る。トンネルのように続く、全面ディスプレイで覆われた廊下を歩いて行く。やたら道幅の広い廊下の右端を、蛍光色の手すりを伝うように歩く。周りの風景を意識することは無い。どうせ毎日同じ風景だ。自動生成された宇宙空間の動画を見せられたほうがまだ良かったかもしれない。昔見たそれは、少なくとも三十分に一度は大小様々な『星』が見えていた。それを見た私の同僚は『非現実的だ』と笑っていたけれど、今思うと彼の批判は正しい。外れだった。どうせ人間のための技術なのだから、見たいものを生成すればいいのであって、それが現実に即している必要はどこにもない。私が毎日行き来するこの廊下の外よりずっとリアリティがあって、飽きることはあっても減入ることはないその映像がなんだか恋しい気がした。移動する宇宙船の外をリアルタイムで描写し続けるディスプレイは、もう三ヶ月は真っ暗なままだ。

一体どれほどの月日が立ったのだろうか。その質問に一瞬で答えを出してくれる機械が恐ろしいほど恨めしかった。社会の無い世界において正確な時刻を持つ意味はない。なら、せめてぼかしてくれるものが欲しかった気がする。ただ真実を告げるのではなく、苦し紛れに嘘をつく人間のような受け答えに焦がれていることに気がついたのはいつ

だったろうか。人間味。人のような心。散々疎ましいと思つていたそれに恋い焦がれるなんてと、一時期は自分の中の人間性に嫌悪感を覚えたが、少し時間をおいて見てみるとなんてことはない、ただそれはバランスの問題だった。それに、人間味のあるコミュニケーション相手ならここにはもういる。

「何してんの」

廊下の中心で声をかけられる。こんなところで声をかけてくるのは一人しかいない。そもそも搭乗員が二人しかいない船内で、私に話しかけてくるものがあるとすれば、それはもう一人か、もしくは幻聴だ。

「何って、報告よ」

私がそういうと、声をかけてきた彼女はいつものように呆れた顔をした。

「どうせ意味ないんだから、書く必要無いでしょ」

「そうね」

これで八十九回目の言葉。これも三ヶ月ほど前から変わっていないかもしれない。それでも、全面ディスプレイよりはずっとまだ。彼女の小言を聞き流す。私がきいていないことなんて、一目でわかるはずなのに彼女は怒った様子を見せない。そもそも私の返事もきいていない。相互承諾不和。彼女は廊下の手すりに手をかけながら、気だるそうに目を凝らしてる。

「何も発見はない？」

ふいに彼女がいう。何百回も繰り返された言葉。なんでもない風を装っている彼女が、この言葉にいつも微かに期待を乗せているのは感情解析をしなくたってわかる。期待に添えるわけでもないし、私にどうすることも出来ないから、この言葉に返事をするときは自分の声に少しだけ憤りと虚しさが含まれている。

「ないわよ」

「なーんだ、つまんない」

彼女はそういうと、身体を支えていた両手を手すりから離して、そのままぐるりと周り、少し飛び上がって手すりに腰掛ける。少し高めに設計されたそれに座ると、彼女の足は落ち着くことなく空中にぶら下がった。

「そもそも、何かあればすぐに談話室に通知が行くようになっていないでしょう」

ほとんど意味のない問いかけに形だけの注意をする。何度も繰り返されたそれに質問通りの意図だけが素直に含まれているわけじゃないことは、私でも流石にわかっている。「でもアタシさっきまで談話室にいなかったし。見逃したかもしれないじゃない」

談話室にいるときだって、常に注意しているわけじゃないしさ。そういうながら彼女は自分の手を見つめる。意味のないコミュニケーションに私はため息で終止符を打つ。

## プロローグ

あの朝、テレビは何も知らせてくれなかった。

二〇二二年、冬。

福岡県春日市千歳町。博多から電車で海と反対の方向に一五分、閑静な福岡のベッドタウンだ。僕たち姉弟は両親の転勤で、二年前からこの街に住んでいた。

日曜日の朝。姉がとんとんと包丁でまな板をたたく音を聞きながら、僕は寝ぼけ眼で食卓に突っ伏している。台所の壁にかかったテレビは民放のバラエティー番組を流している。

「今日のお『博多☆グルメ天国!』ではあ、ここ中州で今が旬! 天然ふぐ料理のお超高級老舗店を紹介しちゃいまあす! まずはおこちらのお店え!」

無意識にテレビを見やると、ネジの緩んだ喋り方をするリポーターの女が、「突撃!」マーク入りのマイクを振り回しながら、どこかの高そうな店の敷居をまたいでいる。

「うわあ、すごい老舗ってフィンキですぬ?」

「ふぐ? 中州といえは屋台があるのにねえ」

コンロの上で煮立つ手前の味噌汁に刻んだネギを落としながら、姉が訝しげに呟く。

「屋台って、おでんかラーメンばっかじゃん……」

眠くて半分興味の無い僕は、あくび混じりに反論する。

昨日も九時まで塾だった。

「もう。稔君にはまだ屋台の良さがわからないかなあ。それに、中州の屋台には天ぷら屋さんだってあるんだよ?」

「中学生の姉ちゃんに子ども扱いされたくないよ……」

屋台というと、仕事帰りの大人が熱燗をやっているイメージしか湧かない。まだ小学生の僕に良さを力説されても困る。テレビでは、皿の模様が透けて見えるほど薄切りにされ牡丹の花のように盛りつけられて、「てっさ」がカメラの前に運ばれてくる。

「ふぐ刺しか。そいういえば一度だけ食べたことあるな……」

この街に越してきたばかりの頃、両親に連れられ家族四人で博多のふぐ料理屋に行った時のことを僕は思い出していた。今テレビに映っているような高級老舗店でもないし恐らくは天然でもない、量が勝負のチェーン店だったが、家族で囲んで食べたふぐは美味しかった。僕がふぐ刺しを欲張って食べ過ぎるから、他の三人の分が無くなってしま

わなないように、姉がふぐ皮の湯引きと薬味で皿の上に「国境線」なるものを作っていたっけ。

あれから、ふぐ料理はおろか家族で夕食をした記憶がほとんど無いのは、家計が苦しいわけではなく、両親の都合がつく日が無いからだ。

へうまかー！ こげんうまかもん食べたことなかー！

ゲストの中年男性タレントが「てっさ」を一切れ口に入れ、女子リポーターに感想を促されて、ご当地弁で感激してみせている。夫婦ともに研究者である両親の転動に伴ってあちこちを転々とするのには慣れたが、地方ごとの方言というのは、いまいち馴染めない。一応基本は日本語だから聞き取れるのだが、自分で操ることは多分今後もできないだろう。どこの学校でも余所者扱いだ。

「うーん、ふぐ刺しも美味しいけど、お姉ちゃんが思うにふぐコースの醍醐味はてっちりかな。それで最後にそのお汁で雑炊を作って、残ったポン酢をかけて食べるのが最高かな」

僕の眩きに反応したのか、姉が持論を展開する。

「姉ちゃんは最後に雑炊さえできれば何鍋でもいいんだろ……」

後、ポン酢をかけて食べるのは邪道だと思うぞ。雑炊は塩だろ？ 心の中で僕の持論を付け足すが、面倒なので口には出さない。

最近わかったことだが、姉はいわゆる鍋奉行である。我が家の夕食は冬になるとほとんど毎日が鍋だ。この前は水炊きだった。確かに鶏がらのスープが染み込んだ雑炊は美味い。

「ふふっ、雑炊は正義♪ さあ、朝ごはんできたわよ」

朝食はさすがに鍋ではなかった。塩鮭、大根のぬか漬けとほうれん草のおひたし、焼き海苔、ご飯と味噌汁。

「稔君、ちゃんとしたいただきますっていわないと駄目よ？」

「へいへい……」

姉が作ってくれた朝食を食べる。食後、二人揃って家を出る。

電源を落とすまで、テレビはリポーターと芸人のグルメ探訪を流し続けていた。

空は青く澄みきって、細かい雲が天頂を漂っていた。風も心なしかやわらかだ。

じきに桜が咲いて、鍋の季節も終わるだろう。

春日駅への途中、コンビニのある交差点の前で、僕と姉は別れた。

僕は一駅先の学習塾へ。姉は近所の春日公園へラクロス の練習に。

「それじゃあ稔君、勉強頑張ってね！」

点滅しかけた横断歩道を駆けながら、姉が振り返って僕



## 牛頭

斯く我は第一の獄じとやより第二の獄に下れり。是は彼よりをさむる地少なく苦患なやみははるかに大いにして突いて叫喚を攀ひげしむ。

ここにミノス恐ろしきさまにて立ち、齒をかみあはせ、入る者あれば罪業ざいごふを糺ただし、刑罰を定め身を巻きて送る。

……彼の前には常に多くの者の立つあり。かはるがはる出でて審判をうけ、陳べ、聞きて後、下に投げらる。ミノス我を見し時、かく重き任務つとめを棄てて我にひけるは、「憂うれひの客舎きやくしゃに來れる者よ。汝みだりに入るなかれ。身を何者ゆたに委ぬるや思ひ見よ。入口ひろきによりて欺かるるなかれ。」

——『神曲』地獄編・第五曲

(ダンテ作・山川丙三郎訳) ——

そこは石造りの薄暗く冷たい通路であつた。

前後は暗闇。頭上も隙間すらない石造り。一定の間隔で掛けられている燭台の灯火だけが微かに辺りを照らしている。全体的に煤けているし空気が悪いのはこの灯火が原因のようだった。

自分は今その廊下を黙々と進んでいる。

独りではない。自分のすぐ後ろに何人もが続いているのが分かった。顔は見えなかったがみな背が低い。どうやら子供のようなだ。自分は彼らを引き連れるようにして先頭を歩いている。

この通路はずっとまっすぐに続いているのかと思つていたが、どうも緩やかな曲線を描いているらしかった。歩いていると燭台の淡い光が燭台の仄かな光がゆらめく影を定期的に作る。そのたびに後に続く子供達は震えあがっていた。皆、おびえきつていた。一体何故こんなにおびえながら自分達は歩いているのだろう。分からなかつた。

やがて、通路の遥か先に大きな後ろ姿が見えた。自分も子供達もはっとして立ち止まり、その姿をじっと見る。気が付けば辺り一帯に生臭い匂いが充満していた。

筋骨隆々の敵めしい体つき。二本足で立ってこそいるが前かがみのように曲がった腰。纏っているのは腰布一枚で身体中をうつつらとした黒毛が覆っているようだった。明らかに人ではなかつた。そうして揺らめく灯りの中で、そ

れがゆつくりとこちらを振り向くのが分かった。

揺らめく灯りの中で浮かびあがったのは、毛むくじらの牛の顔だった。ぎらぎら輝く焦点の定まらない目でこちらをじっと見ていた。そして長い角が見えた。

それはとてつもなく悍ましい、異形の怪物の姿であった。

「……うわあ!!」

男は自分自身の張り上げた悲鳴にはっとして目を醒ました。そして目の前で文机が引っ繰り返り、昨夜読んでいた本が畳の上に落ちていのに気が付いた。

「あ、い、いかん！ 借り物の本を傷めでもしたらもう貸してもらえなくなるわい」

男は慌てて本を拾い上げバラバラと捲りながら中身を確認する。幸いどこも破れたり折れ目がついたりはしていないようだった。男は安堵の息を漏らし、手にしていた本をそっと文机の上へと戻した。

窓の雨戸を引き開けると朝日がきらきらと差し込んでくる。行燈の火も落ちていいる。どうやら自分は夜っぴて本を読んでいるうちに机に向かったまま眠っていたらしい。そして夢を見ていたようだ。襦袢が汗でぐっしょりと濡れている。尋常ではないことだ。

「恐ろしい夢だったな……石で作られた見た事もない廊下。

そして角の生えた——あれは牛鬼ぎゆうきというやつか？ いや、あるいは……」

ぼうっと突っ立ったまま男が今見ていた夢について考えあぐねていると、障子戸が不意に開けられた。

「ずいぶんと大きな声を出されていましたが——どうなさいました？」

部屋を覗き込んだのはこの男の妻、織瀬おりせであった。防寒用の安価な綿入を着込んでおり、その背中には先年生まれたばかりの長男・常太郎をおぶっていた。

妻と子の姿をみとめた男はようやく一心地が付いた様子で深く息を吐き、苦笑しながら答えた。

「いや——少々おそろしい夢を見ただけですよ。大した事ではないのです」

「あらあら。初夢は悪夢で御座いましたか。そういえば近頃は寝付いたと思ったら苦しそうな声をあげられている事が多いですよ。少しはきちんと休まれた方が良くと思います」

「ん、そうなのですか？ たしかに最近徹夜も増えていたし気を付けねばなりませんね。読書をしていると忘我してしまうのはどうにも私の悪い癖です」

「学問もお大事ですが貴方が御身体を壊してしまつては何にもなりませんよ。さ、御着替えくださいませ。朝餉も用意できておりますので」

少し前までは髪の毛を梳くなんてことは全然なくて、ただ伸びたそれを鬱陶しさにうしろでくくっていただけだから、今こうして鏡の前でもつれを取られ、サラサラにされて結われ可愛らしくリボンを付けて整えられているのが、とてつもなく変な感じがした。慣れない頃はもつれた髪にくしが引っかかるのが痛くていつも涙目になっていたのに、今は普段の手入れもあって随分それはなくなった。切る機会がなくて伸び放題だったトウモロコシのヒゲのようだった金色の髪が、今は美しいと褒められるものの一つになっている。くるんと指に巻きつければ、しっとりとした艶やかな手触りがする。本当に自分の髪の毛なのか、信じられなかった。

「んっふふっ、今日もばっちり可愛いですよ、伊緒奈様」  
「うーん……そう？」

可愛いと。たしかに鏡に映った姿に可愛いという言葉は普通で感覚で言えば多分間違っていない。フリルの付いた

ブラウスに、ハイウエストの紺色のスカートに黒いタイツ、それが今日の服だった。昔見た記憶の片隅にあるポロポロの破れたポスターにいたアイドルの女の子がこんな感じで、色褪せたその姿に見とれていた記憶がある。でも、その「可愛い」という言葉が自分に向けられているというのが、どうしてもしっくりこなかった。いくら可愛くたって、僕は僕自身、そんな言葉が向けられる人間だなんて微塵も思えないほどにはその言葉が縁遠かったからだ。過去は薄汚いネズミみたいな存在だったもの。服は体を守るものでしかなかったのに。

「可愛いって、琴音はいつもそう言うけど、あんまり嬉しくないし……その、やめて？」

「とおーっても可愛いですよ、ほら、そんな顔しないで笑って。にーっ」

「えーっと、にー……？　って、しないしそんなの」

「そう、もっと自然に、口角を上げて、こう」

「やめてよ……もう……うーん……」

鏡に映る引きつったぎこちない笑顔。いっそ無表情のほうがマシなのではないか、と思えるような顔だった。もともとあまり笑うことがなかったから、自然な笑顔というものが分からないものもある。そんな僕と比べて、この使用人の琴音はいつもにこにこしていて明るくて、僕なんかよりも琴音のほうがよっぽど可愛いじゃないかって、いつも

思っていた。無愛想な僕とはぜんぜん違う。愛嬌、つてやつだ。若くて可愛くて優しくてなんでも身の回りの世話をしてくれる。僕は琴音がとてもお気に入りだった。この服は、そんな琴音が選んでくれたもの。

「旦那様もお気に召してくださってるんですから、自信を持って！」

「う、うん……」

僕は本当は庭師になるはずだったのに。始めは、そんな話だった。

環境防護地域外の老朽化した取り壊すことのできない大きなタワーマンションの建ち並ぶ、荒れた高層スラム街のテナントにふらりと一人で現れた、この空間に似合わないほど身綺麗なおじさんが、僕を買った。そこは違法な人身売買を行っている店だった。

スラム街では子供がたくさん生まれては、その半分は違法に売り飛ばされる。だいたいは低賃金での労働にあてられ、人ならざる扱いを受けていたけれどスラム街にいるよりはマシ、と言われていた。街を出て行った子供たちはここに戻ってくることはない。

そんな子供たちを救済する運動が始まったと小耳に挟んでいたから、自分も救われるのだろうか、蒼一郎さんに選

ばれたあのときは胸が高鳴った。利用者は身寄りのない売られている子供を引き取ったことを知られるとよくないと、代理人を寄越して現れるものらしいけれど、僕の主人である蒼一郎さんはどうどうと現れて、僕の手を引いて帰った。それは将来が見えなかった僕にとっては、一大事件だった。商品から一人の人間に変わったのだから。僕の代わりに残されたお金であの街の環境が少しでも良くなれば、と僕はそんな願いを胸に生まれ育ったモノトーンのスラム街を去った。

琴音にリボンタイを結われながら、まだ少し寝ぼけた頭で数カ月前の蒼一郎さんとの出会いを思い出す。

僕は蒼一郎さんに買われ、お金と交換で人身売買のテナントを出た。新しい世界への旅立ちだった。古びた灰色の巨大な陽光を遮るタワーマンションの日陰の割れた石畳の道を通り越え、蒼一郎さんのお家・邸宅に向かう見慣れない防護地域の小綺麗な通りを、いろんな話をしながらゆっくりと歩いた。まるで大きな知らない世界に、ぼっくりと飲み込まれていくようだった。

政府の力で有害な物質からも物騒で荒れた空気からも隔離された防護地域の少し無機質な空間は、汚れた世界に生まれ育ってきた僕からしたら異世界だった。僕は産み捨てられなるとか生き残ったしがない一つの命で、違法な人身売買に捕まって売られるほどの人間なのだから、残念なが

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12

これらの空のポートフォリオはおよそ十年前に作られたもので、加工・配布の自由な著作権表示不要の写真素材が用いられた。制作に際して一定の指針はなく、色の単調な空に対してカラーチャンネルごとにトーンカーブを歪曲させ、ひたすらオーバーラップ合成を繰り返した。同時期に作られた絵はこれらの他に二十枚ほどあり、掲載にはある程度洗練されたものを選んだ。以下、左上から右下へと番号を付けていき作品を識別する。

## コンセプト

1

透き通るような空で鏡面を表現した。

2

背景の左側は、塔の影である。

ぼんやりとした赤茶けた背景の右上で浮かび上がるくすんだ色彩を帯びた矩形によって明晰夢のような儂さを表現した。

3

黒い影を背に浮かび上がる彩度の低い原色をイメージした。

4

朝・夕・夜の暗闇が混在する空間をイメージした。

鈍い色と蛍光色を隣接させ、一日の経過を輝きとして表現した。

5

夕方のイメージ。

6

一日の始まりを象徴した絵。  
宝石のような新たな時間の始まりをイメージした。

7

中央の冷たい青色を包む柔らかい灯り。

8

抽象と具体をディテールの広がり不安定さで表現した。

また、GIMPの鏡面フィルターを使って奇怪な順列を帯びさせた。

本来ならば、フィルターに頼るべきではなかったが、この絵に関しては上手くいったように思える。

9

水面に反射する夕暮れ。

10

玻璃と黄金の空。

11

目の虹彩のような色の広がりを持つ。  
暗い影の周囲は僅かに虹彩にあるまじき色を帯びている。

12

木々の合成。

# 暗黒定数式

## THE DARK CONSTEXPR

### 暗黒定数式 Vol.3 (見本)

---

発行日———2016年11月23日 初版第1刷発行

著者———ボレロ村上 南正太郎  
as\_capabl ちゅーん  
4869 ハコ  
如月真弘 かなりあ奈留  
野村

カバーイラスト——野村

発行者———ボレロ村上  
dark-constexpr@boleros.x0.com

発行所———暗黒定数式 THE DARK CONSTEXPR  
<http://dark-constexpr.github.io/>

---

